老媼茶話　巻八

曽
5-6
7

イ 5
56
7

門 信 5
號 36
巻 7

老媼茶話巻之八

目録

一 徐福
一 首樹
一 平家
一 鬼九郎九兵衛勇力
一 舩鐵大地軒
一 漁人
一 頻胡
一 荒源三郎勇力
一 海野通世

注千字文

秦始皇帝徐福に命し草木の事を問し
めある花あるの葉枝果ある徐福童男童女六百余
人ともなひ船に乗りわたらひ家へかへらす
諸明を過くるへきに始皇帝人をつかはして
仙薬を問しむ徐福曰く海底に蛟龍あり
て薬を取かたしある事あるよし始皇帝大に
こと作り大綾彩をとり光残殺す其奥ゟ長サ千
里始皇帝是より病ひを請して身まかりけり

海辺に出にけりかくてうせにけり

齊地記

始皇以術石石自行至今皆東首

佛祖統記

唐の天寶年中南海の漁人劉成李暉と
いふ者大魚を釣得て丹陽にゆく江を
わたるに一夜鳴けり声ハ阿弥陀仏劉成おそれて
夜更て念仏の声此魚の中より聞ゆ大魚舩をめぐる
ひ前にこゝろ阿弥陀仏ととなふ劉成驚て
これをきゝて其魚を江に放つ萬魚僕に涌出て念仏を
中に天地をうごかす劉大きに恐れ
あへる魚を江に放つ李暉ハ聞さる
に李暉ハ笑て曰劉成此魚を得ざりし
ハ己か宝を喪へり此ハ明日劉萩の肉
よりて残りの魚こゝろゆるがすを喰ひけり
劉成驚きて見れハ万魚僕におとり
て念仏声中にきこえて地をとゞろかし劉大におそれ
あはてゝ夜をこめて魚を江にはなつ李暉ハ聞すして

ころ李中といふ者譚をもて劉阮か事に代
伯出して己か室をかへりて先祖の墳をあらため
日又劉薇の門をたつね流るゝ事八十貫(?)か孫ありて疑
日還海奥道といへり

三才図会人物 十二

大食国は海の西南一千里なる山谷の間に樹の
枝の上に花生して人の首のことし指(?)によく
ものいふ人よふを問ふに事あれは只笑ふのみ
のこと其まつりまたしくは則ち桐(?)落る

いへり

羣居解頤曰

嶺南八月腹(?)にあしし草葉をさし潜てゝ裏にし
取りて蒲(?)の門にかりて茄子(?)の枝に都(?)か根二三年
の間も潮(?)にしくして枝幹も長して大樹となる
夏秋熟して実叶り樹に上りけたしまうて之を
採つむ三年ましくして後樹も年ふりて子稀にし
則ち伐去てまた別に嫩きを栽るといへり

緑珠(?)間記

建久九年の冬大将頼朝相模川橋供養

引出して陣のうちを見て船より八的をさして射
みなおちられし　源氏義廣義經は宇治
下の人しりぞきける　頼朝は同じ年合
戦のれより平氏は打捨てうちおち
に福原須の浦に平家の十萬騎あまり籠
子の船追て海戦時福原の人をうちつなり
やしまを見付られしまれをつれて見えて西海
まて去りこえつる安徳天皇ともに身をなげ給ひぬ
後は源氏に入しに判官病つきのぼり
翌年正月十三日にうせたまひし

平家物語

琵琶法師語

淡路の國の住人淡路冠者義久と六條判官爲
義の末子年淡路の大將軍にてあり補せ
前戦ひつらけさしうし冠者義久の守り淡路
寄せ来乃淡路義久討取とりし者見戦ふうし院
ふり白峯の崇徳院の御廟所参給ひし御扇
まいらせたりむかしの琵琶を鼓りかなし法
味方に参りける人義經乃首を手にうけ見せ

せめくてれ製ひしはるをおもへしけれ一句よ
みへ侍りし一七日みひしきたりしけれ様を寿永
三年二月六日の夜ハ我もうたゝ心に思よし
承るへし敷りまりれ時よ讀める

伴之跡のさくらを風にしれは涙なる
天飛雲にうつらて聖もの

御殿時鈔しく

我ならぬ雨さえつもらしき世の
天の戸まくる世をさうなりせん

とりわ和小詠しけりてありとしく大礼明年
よ家りし蓮華院ときつもとまり一の谷にてまうさ
軍の姫様見あしても大の人の上るとおもとを手を
實のるを寒のろしく年をいくさを知りてもしる
うれ望みず扶服売る長日川さけくさるるしつの多
き年ぬとりし見ハ大物酒家の舞の日の貞一銚
風楽ともりおとこ一トさしつかてらうをさ揆存知れ
ましくて歎なくべきかさしきまされ七の辰の
ありまいの陣ほより火焔を後ひまるとおもへくは
妙实よりせ風おし流し蝙とつきと事をさ

御しくあり動く存分なにしし諸軍勢乱
進みて深入しつけおちられ是をきて猶手に能登守ハ
引退もなく返ゆき宮に能登守友の命乞讃岐乃
七郎清時も西城にして落行しに太郎か跡
の後ろに尼彼の御寺しるし冑甲持ある
倒出ありまれど能登守の死骸ハ何も
つられのあらハ腹切て川へ入と申す源氏
の大勢つきにて入りせひあまた打振て御方の
落のびうり散々程の頸首安田遠江守義
定の家の子田原源吾とりて其首ハ則到

首帳にしるし頸をハ其後七條河原に
獄につなけ晒せられけるとぞ

釜ヶ淵川獺

毛利大江の元就の士荒源三郎元重ハ藝州高
田郡吉田に住せし天文三年八月吉田釜ヶ淵に
化生の者出て道過の男女童部を捕へて
淵へ引けり人民家高家門を閉て吉田郡山の
城下往来絶たり元就是を伐んとて荒源
三郎に下知ありしかバ源三郎ハ取あへず井上ありて

信濃源氏末裔なりこゝに七人にあまり力量七十
人力なり神通摩法を行へハ大蛇ともいへ鬼神
あくもあやまりなしと万民あふ川まの光?の賤
市をなす時に源之亟元重様によなり下万千
大谷十文字にさし淵の淺之に立大音あけて呼
まけるハいかに此淵の化生よつしたまへ此世人
民を害喰ふ其科によりて只今殺害の落
り荒源之亟重りものぎ衛身せよと呼はり
けれハ淵の底にゞうごき逆浪立て飛隊中あふ
れて流色く元重か足を中なひし

とり出んとせし源之亟是を見て屆しひるま
と足をあの兵戦振り武くに化生ハ大河
合ひておりだしに化生の力万人力ともいへし山
のせしかしらもこしとおりてぬけ前おくを
見れは鬼のはおそれ淵猿なり　信濃川大群よ　まよあんく
されハ淵に竃ふ東あふあれども力強くあ
あらねど力あらしとよしせ及ばねば淵をつきと
らんとするに意し是てよて色くして
押合ひし河に淵をつかんでさゝきをよあし
振廻しけれハ水竃より出て淵猿息も

にかおそろしくかれハおそれて岸より化生を見たり
そのとき隔りければ此間の徒人をさりやうして一同
にあつまり騒ぎ噂して静まりけれとも元重仲に
捕我縄に縛り括りて塚中へ海り釜か淵の化生
生捕りにして消へしかば元就感悦しかりし津
に源三郎ハ大蛇退治せし功とかを思ひかけ褒美
国中の者共我語よりけれハ源三郎請をしてしかも
る高名を立しハしかし御貴賞を給りしハ可卸く
道悉法りして英ひ語りけるも有力日御参にさた
是我国我として帰りけり

鬼九郎左衛門事

天文の頃大内家の士に世に五九郎左衛門といふ大力
豊武士あり長門の国海か川といふ所に
住居して清水大なる淵あり或時其淵おりて
其底をのぞきけるに何か大蛇なるへしと人
民群集せり五郎忽之ハ我大力武勇の名を得る
つゝ淵の底の声我きけれハ人の噂りもきく
しこゝろ力をぬきて淵に飛入りけれハ大蛇鉾の舌
我出しての多んとせし九郎左衛門二ツ力にて古

渡に出て手をつけて探に綱を附て文字を通へハ大蛇に
綱付けし見んとするに淵中の大蛇ハ目を見ひらき
血眼はしる事必に川をさぐりしに切後の門を
見込し人々を呑むとすると見へしに白骨かさなり
国ハ動しかと腹をもありさやをかけて背中しく
掠り縄をほしけれハつらぬく腸をつなぎ取りて斬り
其力ハ未国後の名誉なり剣大門義隆に奉り
けれハ大蛇国後と号し重宝と称せしハ綱を
なおして蛇のむねの毛のかけたる最より不思議のしるし
もありし見より後しハ落丸となりし剣と名付

残けり

海野恒世

後一条院の御宇に丹後国に海野恒世といふ
角力の上手にて大力なり恒世が家の侍に大紙といへる
大力生勝りて西国にて強しとおもひける或夏の天
きのふともしく浅々くるしかりし恒世帷子をかひて
足駄をはきて弦撥を杖につきて小童壱人打連て件
の淵の岸際に大木の本に探をかけて綱を釣りしき
つなし暑き後より見るに俄に川の瀬張り

池なる岸の草むらより出て来る蛇の中より
頭をさし出し暫しありて恒世をまもり
後見居たりし又其の淵に入ぬ向の岸へおよぎ渡
り来る其蛇七尺八寸ばかりに伸びて尾の中より二まきばかり
出し岸にありける恒世が足に二まき三まき巻付けり恒世
思ふやうかゝる時蛇の引くるとは知りけれども何程の
事かあらんと独り心に力を出し踏張りて蛇の力強し
蛇も引ければ恒世も力を出して踏張りて引けば
ら足に力を入れければ蛇の力弱りて引ければ
胴中より切れて引けるに川の中の水は血汐となれる

恒世さしも力ありける相撲なれば漸くに引き
後ち足を見れば蛇の足にまとひし跡は酒をもて洗はせ
給ひしかども跡はなほ消えずして其の所に治り
切れたる蛇の首は其の後大きなる淵に流れ入りけれ
此の蛇の身は其の大きさ淵を恐れて居たり
其の時に世の人はおどろきあへり其の所の者集まりて大蛇
の切れたるは如何なる物にかありけむと見る人多し
此の大力の恒世は相撲人にてありければ
其の後は人を増し大相撲人
なりけれは此の蛇を力競べして力も劣りて勝ちければ

恒世か力よく牛ゟも小石人力すくれたりし
此恒世か後ハ角力の召ありて陸奥の国の住人真
髪の中村と云ものと相撲にて中村既に恒世か胸を
角して治へ押しあけしを恒世川辺にて
くゝりつけて恒世か角力には稀なり
れとも大力にて胸を押されしもその昔を通り伝けく
本国へかへりてしはらくありて其の病にてしにけり
くるしけり

秀郷殺大蛇

淡海国平の瀬に秀郷あまたの人のまへにて大力の誉あり
ける頃其の池に大蛇すみて人民をのみ悩まし
ける大蛇を退治せんとて弓矢をたつさへ来り
あまりの池へ出て汀に来りて大蛇を見るに
此池に大蛇住むと出て膳臭をかぎ向ひけり
かれハ蛾の如く一面に雷光を放ち池の波逆巻
て大蛇ハ秀郷の左の袖を喰んとす
秀郷大の腹にはたらきて大蛇の口へ矢を入れ
ば逆へて見たりしに文字ありけり秀郷を助け

秋鐵むら残らず此沖の大蛇見残追ふ草木の上
をなしる如く疾風のふくしきよう押よりすも
こまで一里斗の所より通にあゆむと云所あり其
よ楠の表まで此處につけよる残余へは是れは大蛇秋鐵
を見まひ處の指すの所り見残見切らたる所を秋鐵
如うくり二の矢を射らたり平射の矢大蛇の喉
を射出し大蛇大り弱りて是を切ふ事かふ
秋鐵りもき様よ込りて是を残余へつをとらる時
大蛇追ひ来り門の外残余り残へしし肉へつへんと
まる時秋鐵の羽網於行集とむらひ長カをまて

大蛇の首を切落し其村大蛇網於よ長残吹くくるに
身熱湯をうけるごとくしく毒氣よあれりくあり故麺
しく其日の暮るよ死す秋鐵の象かるるも亡所あり
死しるる秋鐵も肉あるるも皮膚あらく多くしく
死ありり大蛇の所存る能しく秋鐵の子孫特にくるり
とぞ　淺羽孫は三代頃しきり秋鐵

化体

淺野孫三郎長政の末子作勢へ使よゆきしり

道に暮京を後にしけるに叶家に残通りけるに
変化の者あらはれ所々に火焔立て雨動吹きの所の
如し火光の中にありて残見ればかくのことく
本笑三千余歩ある寺をも無の事とも有りけるを
尭残ゆかり火炎忽々きえて勝負を決してまた追まり
伴勢を出きて明け渡して残る者を見ればみな
しく有る所の跡より血流出て夜明さてもとの
遠近の海より立ちしに跡もなき事もきき
との所の中をしらし此夜火炎の中より皆
残をしきへき事をよしを見てかなしみにそ尭残ゆかりて

帰りて人にかくとかたりけれは卿は此後ふしきに
めつらしき事にしてこそと秀ましましてまた
とてかくのことくにたまにて是をよし見せられよと仰付
られ名の川かみよりしもまてかけ渡して刈薬草
し浅野弾正事を申されけれは秀吉公御覧ありて
遠見に見給ひて秀吉公浅野長政に仰られ
らし所にてはしを一筋まて切られに傳中書の紙
かゝる鎌倉に見事にすなはちみて不思議なりとてかつてに
秘蔵せられしに後京極摂政忠実の家に傳
まれり